昭和62年6月15日

郷土あれこれ

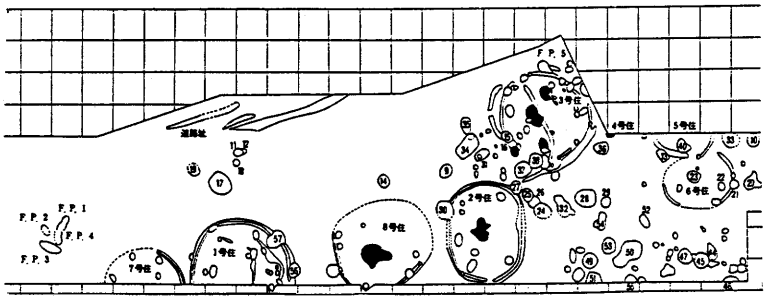
郷土館だより
第19号

五日市町立
発行　五日市町郷土館　東京都西多摩郡五日市町五日市920-1　電話0425-96-4069　有線4607

五日市の縄文人（じょうもんじん）

留原遺跡の発掘調査から

▲発掘状況　▼住居址と土坑（穴）の配置図



はじめに

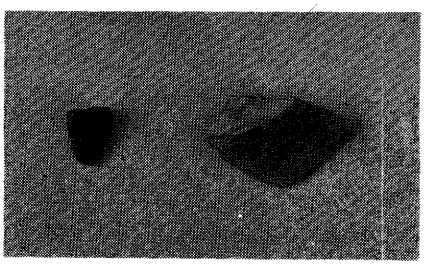
五日市町留原地区で、都道32号線の拡幅工事にともなう発掘調査が行なわれた。調査は昭和60年7月から62年1月まで1年7か月を要し、その間住民や通行者の方々に多大のご迷惑をかけたが、成果は十分に上り、貴重な資料を得た。五日市には考古資料の埋蔵地が多いが、本格的発掘の行なわれた例は少い。今回の発掘により多くの縄文住居址と遺物が出土し、五日市縄文人の生態が、格段と明らかにされた。

当郷土館で発掘資料を保管することになり、目下その一部を展示中であるが、この際調査会で発行した報告書に基づき、五日市縄文人のプロフィルを紹介してみよう。

1.どんなものが発掘されたか

留原遺跡は秋川の南岸に位置し、湾曲した秋川の横腹につき出た河岸段丘上にある。留原地区は上下二段からなり、川べりの低い段丘は「中村」と呼ばれ、上段を通常「留原」と呼ぶ。留原遺跡は上段にある。ここは見晴らしのよい丘陵（標高180～200m）で、広さ東西、南北各約500m、面積24haある。北は秋川へ向ってゆるやかに下り、南は小峰峠を含む五日市盆地の外周山地に向ってゆっくりと上る。南に山をもつといっても標高300m前後の浅い山地で、日照の障害も余りない。前は川に臨み、後は山を背負う台地は原始人の最も好む場所である。発掘の出土品は先土器（せんどき）時代から、平安時代まで凡そ1万年間の遺物で、総計14,000点に達した。

先土器時代とは縄文時代以前の、まだ土器を知らなかった時代をさす。今から12,000年以前とされている。出土品は槍の穂先状の尖頭器と呼ばれる黒曜石1個と、フレイクと呼ばれる刃状の小型剝片石器3個である。数は少いが貴重な発見で、尖頭器が隣接秋川市の前田耕地遺



尖頭器(半欠)とフレイク

跡から多数出土しているにつけても、今後五日市地区の先土器時代の究明がまたれる。

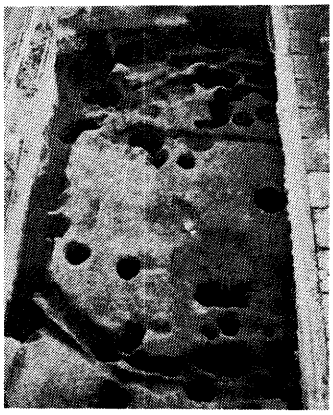
ところで、出土品の大半は縄文期の土器片で、12,630点に達した。一口に縄文時代といっても約1万年間に及ぶので、これを通常、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6期に分ける。留原出土の土器の内訳は次表の通りである。

縄文土器の内訳		
早　期		74
前　期	黒浜式	18
	諸磯(もろいそ)式	18
中　期(前葉)	阿玉台(おたまだい)式	14
	勝坂式	1,170
中　期(中葉)	加曽利(かそり)E式	11,342
	曽利式	
合　計		12,630

一見して明らかなように、中期中葉（今から約4,500年前）の土器が多く、90%を占める。12戸の住居址がみつかり、土器の多くはその住居址から出土した。従ってその住居の住人は縄文中期人、なかんずく中期中葉の人々であったと推測される。

2.環状集落があった

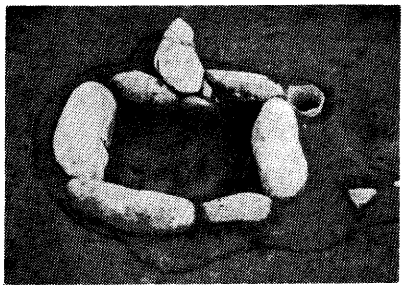
1頁の図は発掘された住居址や土坑(どこう)（穴）の配置図である。発掘が細長い道路面に限定されているので、住居群の全貌をつかむことができないが、弧状に並んでいるところから、中央に広場をもつ環状集落があったことは確かと推測されている。写真は1号住居址の状況を示す。柱穴が多いのは、住居が何回となく拡張された為で、家族数の増加などに対応したものであろう。環状集落といっても、住居址すべてに、同時に住人がいたのではなく、せいぜい三、四戸、人数にして20人足らずの人々が集団生活をしていたのではなかろうか。まだ農耕を知らない狩猟・採集生活の縄文人はそれ以上群れては暮しきれまい。

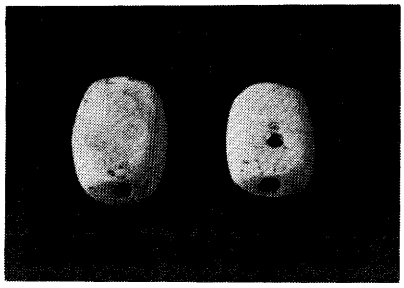


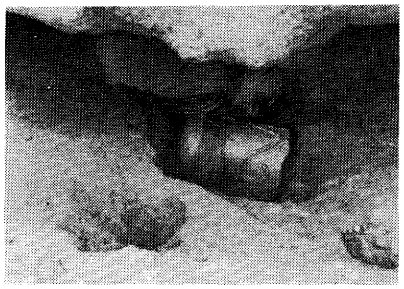
1号住居址

住居は地面を5,60cmの深さに掘りくぼめた楕円形の竪穴住居である。長径5～6m位、屋根は草ぶきで、中央に炉があって煮炊し、1戸5、6人位まで住める。冬も暖かく居住性は見かけより悪くないらしい。

留原遺跡は勝坂式土器も数多く出土しているので、中期の前半から人が住み、中頃に最も人影の濃い集落を形成していたと想像される。彼らは獲物を追って移動することもあり、住居には自らキャンピング場と根拠地(ベースキャンプ)とあったが、留原遺跡はがっちりした炉址、おびただしい大型土器をみても縄文中期人の集団が根拠地として住みついた縄文留原“むら”であったことは間違いない。ここを根拠に冬期には五日市盆地内の他の集落の男どもも集まって山地に分け入り、シカ、イノシシあるいはカモシカを中心とする猟がさかんに行われたことであろう。







上・炉址　中・大珠　下・勝坂土器

1号住居と重なるようにして発掘された土坑(56)(57)から「大珠(たいしゅ)」（写真・中）と呼ばれるペンダント風の装身具が1個ずつ出土した。出土状況から推して、この土坑は墓穴で大珠は副葬品（死者と一緒に埋葬された品）と解される。ここには完形に近い勝坂式土器も埋められていた。(写真・下)　(56)、(57)の被葬者は何やら特殊な身分の人と受けとれた。一般に大珠は環状集落からの出土例が多いという。

3.何を食べていたか

貝塚は縄文人のごみ捨場であるが、ここの遺物からみ

て、縄文人は殆どあらゆる獣鳥類魚介類を食べていたことが知られている。また各地の住居址から、クルミ、クリ、ドングリなどの堅果類が炭化した状態で出土するごとがあり、狩猟採集生活の実態が略々推測されている。今、こうした一般の定説を土台にして留原遺跡の五日市縄文人の食べ物を探ってみよう。

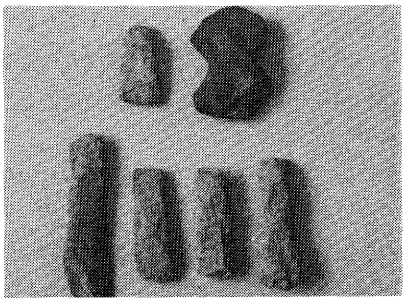
1. シカ、イノシシを中心に、ウサギ、タヌキ、キツネ等の小型動物から、ヘビ、カエルに至るまで食べられるものすべて。
2. 各種の鳥類（ただし秋川は渡り鳥が大量に飛来する場所ではないから捕捉量は少なかろう。）
3. 秋川の魚類（ハヤ、フナ、ウナギ、ヤマメ、コイ等のあらゆる川魚、中でもアユ、もしサケが上ればサケ）
4. 春　木の芽、ゼンマイ、ワラビなど若草類
5. 秋　やま芋、ゆり根などの根菜類、きのこ類、あけび等
6. クリ、クルミ、トチの実やシイ、カシ、ナラ、クヌギ等のドングリ類

以上のものが考えられるが、彼らの残した生活用具―狩猟用、調理用の石器、土器から裏付けてみよう。

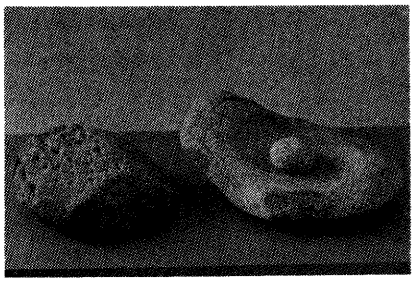
出土石器一覧

石斧（せきふ）	171
磨製石斧（ませいせきふ）	3
石鏃（せきぞく）	19
掻器（そうき）	4
石匙（いしさじ）	2
磨石（すりいし）	12
凹石（くぼみいし）	18
石皿（いしざら）	23
大珠（たいしゅ）	2
計	254

左の表のうち、狩猟具は石鏃だけであるが、この数が意外に少い。狩猟を本命とする集団であれば、今少し多量の遺物を残してもよさそうなものである。また石匙（皮はぎなどに使う）の数も少い。思うにシカ、イノシシの類はあり余るほどいたわけでなく、動物性食品を補う植物性食品の採集が女・子供・老人たちによって盛んに行なわれたと思われる。石器の中では石斧が圧倒的に多い。石斧というと木を切る斧を連想するが、用途はもっと広い。例えば山いも掘りなど、石剣状の長い石斧が使われよう。縄文人は山いもや栗の木を栽培する程度の知識は十分持っていたといわれている。一説に縄文人は既に焼畑農耕を行っており、石斧は原始的農耕栽培の用具として地面を掘り耕すのにも使用されたという。当地の石斧の多くは地元の小仏層砂岩で作られこの石は層状に剝離し石斧をつくり易い。もろく欠け易いが、惜しみなく使い捨てできる関係で数も多く残ったと思えるが、



石斧のいろいろ



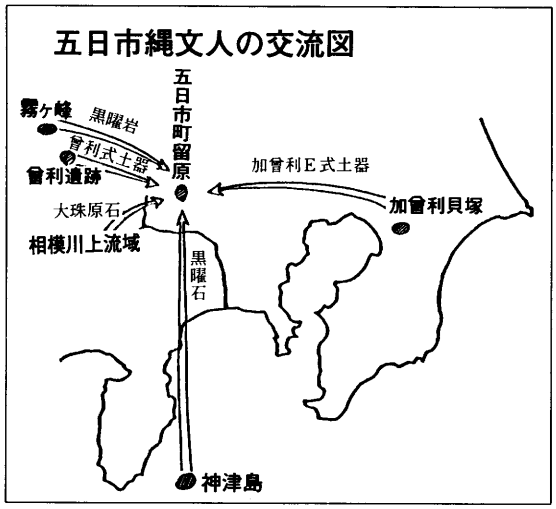
凹石・石皿・磨石

このように多量出土したとなると用途が気になる遺物である。ただし縄文期農耕の実態については究明されていない。次に多いのが、石皿、磨石と凹石である。凹石は表面に小さな穴のある石でクルミ、クリなどの皮をむくのに使い、石皿と磨石は粉にするのに使う。三つ揃い一セットの道具である。思うに秋になると山には沢山の木の実がなる。これらはシカやイノシシなどと違って確実に手に入り、しかも保存が可能で、安定した食生活が保証される。唯一の欠点は堅果類の多くはアク（タンニン）が強く、そのままでは食べられないことである。そこで調理法が工夫されねばならない。堅果類のアク抜きは乾して粉にし、水にさらし、煮沸するとよいという。凡らく縄文女性の主な時間がこの作業にふり当てられたのではないか。出土した中型小型の土器をみると火にあぶられた形跡が歴然としており、煮炊（にたき）の道具として使われている。アクを抜いたこれら堅果類の粉は最後はダンゴ状、パン状に調理されて食べられたらしい。肥えたニホンジカなどを斃した日はみんなで腹一杯食い溜めしたことだろうが、以後何日も不猟が続けば参ってしまう。こんなとき住居の隅にクリでもドングリでも貯えてあればどんなにか心強いことだろう。大型土器はこうした食料の貯蔵容器と考えられる。これで冬越しできる。春になれば野山は一斉に萌え、新しい食料にも恵まれよう。因みに縄文人の平均寿命は30才位と推定されている。やはり生活は文句なしに厳しかった。

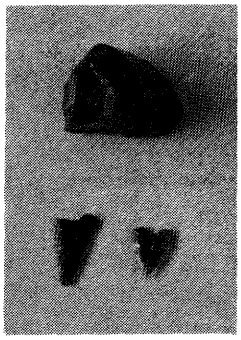
大型土器（曾利式）

4.五日市縄文人の交流圏

留原遺跡において出土した土器、石器の紋様、素材等を検討してみると、意外に広範囲の交流、交易のあとが認められ彼ら五日市中期縄文人の生活圏がきわめて広域に亘っていたことが改めて理解される。最後にこの点をみよう。

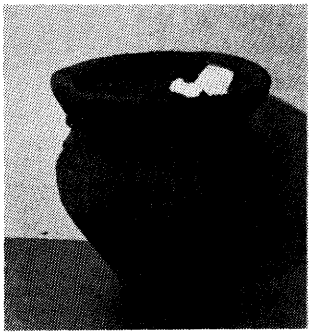


縄文土器はその紋様・形態により製作の年代、地域が略々研究し尽され、編年表、分布図が明らかにされている。留原遺跡に多い加曾利E式土器は千葉県加曾利貝塚の出土品に基づいて命名されたもので関東一円に分布している。一方最も多い曾利式土器は長野県曾利遺跡（八ヶ岳山麓）に因んで名付けられ、分布は長野、山梨、両県の他神奈川の一部に及んでいる。わが留原はこの両土器の交流する地区で、両者の様式を混合した作品も見受けられる。若干オーバーな表現をすれば留原遺跡は加曾利、曾利両文化圏の接点ということになる。また土器には地もとで焼いたものと、他所より持込まれたものとがあるという。大変手のこんだ同形の土器（写真）をみるにつけ4500年の昔既にプロ的な製作者がいて、その腕をふるった状況が想像される。


黒曜石核と石鏃

次に石鏃等の原石である黒曜石について、その成分を分析し、原産地を求めたところ、留原遺跡出土の黒曜石は伊豆七島の神津（こうず）島産と長野県霧ヶ峰産の二種であることがわかった。黒曜石の原産地はこの周辺では長野県和田峠と、伊豆半島にあるが敢て180kmも離れた小島の産出物を使っているのは面白い。特別な交易ルートが何らかの関係で成立していたものであろうか。最後にめずらしい装身具「大珠」の原石（緑色凝灰岩（グリーン・タフ））についてみると、五日市に最も近い産出地は、相模川上流域と関東山地の西側（長野県側）であり、どうやら相模川上流域の可能性が大であるという。

左・勝坂式　中・加曾利E式　右・曾利式


同形2個（曾利式）

狩猟採集を生活手段とする縄文人はその行動半径が広く、文化の交流、物の交易も意外なほど活達に行われていた様子が、おぼろおぼろにわかってきた。しかし一つのことがわかると、逆に二つ三つの疑問が新たに発生する。いま一番不思議に思うことはあの環状集落をつくって暮した留原遺跡の縄文人が、ある時期から忽然と姿を消してしまったことである。縄文中期以降の遺物はない。秋川をこえた対岸の台地五日市高校構内に後期を中心とした有力な縄文遺跡の存在することは一つの回答になるかも知れない。また未発掘の小倉遺跡もこれに対する何かの回答を秘めているかも知れない。五日市縄文人がわれわれ子孫に与えた興味深い研究課題である。

付記　1．五日市高校遺跡からは、大形の耳飾、土偶など、精神生活の次元がやや高度化した遺物や多量の石錘（川の網漁道具）が出土している。

2．本稿は発掘を指導・担当された宮崎博・森田安彦両氏のご教示に負うところが多い（文責石井道郎）。